
傍からみたら不良男

面目躍如

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

傍からみたら不良男

【Nコード】

N4848B

【作者名】

面目躍如

【あらすじ】

周りから向けられる視線は恐れ。原因は俺の顔。相手を恐れさせるこの顔は俺の長所で短所そんな中で俺を待つのは断固俺の存在否定の妹に小柄な妹の同級生。マイペースアンドハイペースな先輩に物静かな生徒会長。いろんな意味で化け物な幼なじみに今は亡き両親。行方不明な兄に死に掛けジジイといつもフフフな婆さん。その他もろもろ。頼むから普通にしてくれ。そんな俺の生活録。

第一話 うれしくもない新学期（前書き）

これはあくまでフィクションだ。同姓同名がいたら、これが運命だったとあきらめてくれ。そしてコメディー的なものはあんましでてこない。そこだけは気を付けてくれ

第一話 うれしくもない新学期

なぜかはわからないが俺を見たほとんど奴らは俺を不良と勘違いしやがる。

教師には白い目で監視されてる。全てこの強面と出で立ちのせいだ。

金髪のツンツン髪。釣り上がり気味のイカツイ目。長身というのもその要因になっているのだろう。顔は悪くないらしい。

信用できないが。

そんな俺の高校生活が舞台だ。

歩きだした足取りは重い。今だに寒い四月上旬。俺こと檜 慄夜は学校に向かって歩いてきた。別に期待しているわけじゃない。何もなければいい。と思っているだけだ。離れたところに立っている親友の名島 師走

名前どおり十二月生まれだ。なかなかの優等生の師走は俺を理解してくれる数少ない人物だ。

「妹さんはどうした？」

開口一番に聞くことはそれか？先、行ったよ。久しぶりにはしゃいでた。しかも、すっかり名前の名義、母さんの実家のやつにかえてたし。

「大変だな。妹さんは。」

「俺の心配しろよ。」 新学期。俺は2年B組。早速嫌な気分だ。耳を澄ませば聞こえてくるさ。俺の頭痛の正体が。

「わっ、怖」

ほら来た。

「なんだかな」

「元氣ないねー！どうする！暴れる！にははははー！」

俺の隣にいるのは3年生の朝日楓さん。HRですが、あなたなぜここにいるんですか？

「遊びにきた！ イエーイ

！」
ハイペースそしてマイペース。元気ですね。その元気の一欠片でもくれませんか？

「元気ないねー。りっくんのために一肌脱いであげましょう」

頑張るな。一肌も二肌も脱ぐな。背筋がぞくつと来たぞ。

尊敬語使う気にならないほどに悪い予感しか、しない。

「早く戻ったほうがいいですよ」

何を思ったのか。先輩は俺の近くまでくると…。

「ふふふ〜」

何かやわらかな感覚が頬を駆け巡る。柄にも無くボケ〜としてしまった。その間に先輩は手を振って去っていった。

嵐のような人だ。と思うもさっきのことが頭に浮かんで頬が赤らんだ。肩にポンつと軽い感触がした。師走なんだ？

「大人気なのは良いことだ。しかしな。HRにやることじゃないぞ。」

クラス中の視線を集めた俺は空を睨んだ。本当はただ空を見ただけだったが周りには睨んだように見えたらしい。無難に授業をこなした俺は、購買部の前で考えている。パンを買おうかと思って財布をだそうとして空振りした。ふむ、忘れた。というわけで

「腹減ったー。」

外の桜の木の根元で横になっていた。ここはいつも人気でガラガラなどありえないのだが、購買といい結構不良というレッテルはパースポート並みだ。

「腹減ったー。」

妹に金は借りれば良いのだが、俺との関係がばれるのは、俺としても妹にしても嫌だろう。

「あ〜。」

第二話 幼なじみと頬の傷（前書き）

かわいいそんな主人公です。幼なじみは初登場ですね。化け物娘健在ですたい。生温い目お願いしますっす！

第二話幼なじみと頬の傷

やたらと重いカバンを片手に俺は走っている。

何故かって？

弁当を幼なじみにもっていくためさ。

これは朝の習慣。

弁当を作るだけならまだいい、だがカバンいっぱい食べ物詰め込まないといけないのは、やってることうちの腹がもたれそうだ。

毎朝毎朝この弁当を作るのに何時間かかることか。妹はメチャクチャ下手だし、あいつはいつも寝坊だし、あいつの両親は単身赴任中だ。ならば必然的に俺が作ってやることになる。いい迷惑だが、しゃあない昔の恩もあることだしな。

幼なじみの部屋に入る。部屋は惨劇に近かった。部屋の真ん中には大破した目覚まし時計。部屋の主は今だに夢の世界に旅立っている。安心しきった安らかな寝顔で……ベットを粉碎していた。

相変わらずというか、たくましいな。朝日先輩とは違う意味で。

俺は幼なじみこと。

宮田 加奈に手を伸ばす。頭にあたる寸前で手首が掴まれた。万力のような手で。もちろん

「いだっ！いだだだだだだ！折れる！折れる！うわ！食べるな！噛むな！抱きつくな！」

どんな夢を見ているのかわからないが右手が未だ加奈の口のなかで抱きつかれているんだ。さてここで問題だ。この状態を第三者が見ればどう思うだろうか？ それに加えて今はまだ朝六時。見方によつてはそれに見えなくはない。だが最悪なのは加奈がこの状況で起きることだ。

起きたら？

考えたくもない

でもな、それをするのが神様なんだ。

いきなりパツチり開いた目をみて、俺は思う。
お手やわらかに頼むぜ。

「お前どうしたんだ？その顔。」

師走は変な顔して言った。そりゃそうさ。引
つ掻き傷のオンパレードに両頬のビンタのあとは俺をどんな奴に
も同情されるような顔になっていたんだから。あの後、加奈に謝
ってもらえたからよしとしよう。

第三話時計買いのつもりが……（前編）（前書き）

まどろっこしくなっただけど許してくださいな　　後編は近日中
によろしゅうみたなかつたらみらへんでもええよ。

ついでに妹さんの名前は　　皐月です。さつきをよろしくたのんま
す。みんなの名前の読み方はもうすぐ　公開おくれでごめんな。

第三話時計買いのつもりが……（前編）

一寸先は闇と言うことわざがある。ならば、俺が置かれている状況は闇、真っ只中だ。親友の師走は役員会議で遅い。そんな放課後俺の右手を掴んでいるというより潰している加奈に左手を握り締めている朝日先輩。

それに付いてくる妹とさつきわかったこの前の大ゴケ女こと岬 宇美。

そんな奴らと向かっているのはショッピングモール。何故かって？この前、破壊された目覚まし時計の代えを買いに来たのさ。それに付いていかなければならない理由は妹だ。

この腹黒妹は加奈にこんな提案をしゃがった。

「荷物持ちいかがてすか？」

俺は物か？何故に妹にこんな仕打ちを受けなければならないんだ？俺、恨まれる覚えがないぞ。

なぜか勝手に行かなければならず、途中で朝日先輩と会い、そしてあの大ゴケ女にあった。その時の経緯はこうだ。

曲がり道でばったり。

顔を紅潮させ、頭から煙をだし、気絶した。みんな俺を白い目で見ると。問い詰められる。白状する。結局殴られる。言わせてくれ。

俺のせいじゃないだろ！俺が無理矢理したわけでもわざとでもないんだから。

倒れた宇美を起きるまで俺たちは近くの公園で休憩をした。腫れた頬を冷やす時間がとれてよかった。

青あざのまま行ったらより不信者だ。

「ふにゃ？」

可愛らしい声で起き、目をゴシゴシ。周りを見回し俺を見つけて、また気絶した。「まで！まで！まで！まで！」

一部始終を見ていた俺は肩を掴み、振る。

「起きろー！気絶すんなー！」

「ふぁ、ふぁい」

やっと起きたか。まったく。おいその奴ら、ほほえましそうな顔するな！

「えーつと……」

向かい合って正座して俺たちはお見合い相手か？

そのこの奴ら、なんか助け船寄越せよ。その中で加奈は俺を睨んでいた。なんで？

宇美は周りをまた見渡し泣きそうな声で一人の人物に話し掛ける。

「さっちゃん」

「は？」

さっちゃんと呼ばれた人物に向き直る。

「おい、お前、俺に何も言わなかったよな？」

「言わなかったとも我が兄よ」

張り倒したるか。この腹黒妹。

「兄？さっちゃんのお兄ちゃん？え？え？きゅ」

またぶっ倒れた。

「……と言っわけだ。わかったか？」

「えーつと。先輩の妹さんがさっちゃんということですね」

「そういうことです」

何がそういうことです、だ。お前のせいだが！

「あまりにもおもしろくてくっくっくっ」

悪魔だなお前は。

傍から見たら不良男

第四話時計買いのつもりが……(後編)(前書き)

元気こそすべてですよ

第四話時計買いのつもりが……（後編）

やっとのことデパートに着いた。すでに俺は肩で息をしている。だが、朝日先輩と加奈は今だに元気だ。その元気はどこから湧くのか知りたいね。

三階の雑貨屋に行くとき多彩な時計があった。

「で？どれを買った……って！無視すんな！」

四人は品定め中だった。

「これ！これなんかどう？」

人の話を聞け！

「可愛いと思わない？この『くまの〇ーさん目覚まし時計』」

いやいや、お前に必要なのはこの『熊でも起きる絶叫目覚まし時計』だよ。

「ふ〜ん」

「ふ〜ん」

まで！許してくれ。手をゴキゴキ鳴らしながら近づいてくるな。

「天誅——！」

俺は意識を手放した。

目が覚めるとそこにはデパートの天井が見えた。

「起きたか？兄」

「ああばつちりだ」

「相変わらず、兄は火に油を注ぐのが好きだな」

「うるせ」

そこで気付いたが頭が暖かい。いや、頭の後ろが暖かい。なんだ

これは。

「ふふふ」

「なんだよ」

いつにもない妹の無邪気な顔を見たら妙に落ち着かなくなった。
「他の奴らは？」

「あそこで太鼓の名人をしている」

妹の指差す先に加奈と朝日先輩はいた。パーフェクトを出し、ハ
イタッチしていた。宇美は周りを和ませている。

「元気だな」

「じじ臭いぞ兄。それと兄、退け」

いきなり足が外され、後頭部を強打した。星が見えたね。

そろそろ二回目が終わる頃だろう。

妹と宇美は宇美がほおを膨らませて、話していた。よほど不満だ
つたんだろう。加奈と朝日先輩は肩を組んで語っていた。居酒屋
屋からでてきた親父に見えなくはない。

「楽しかったぜ」

誰かに言っただけじゃない。これは本心さ。こいつらを見てるだ
けでも楽しかった。

「早くこいよー！」

「急ぐんさー！」

「遅い。バカ兄」

「あの…その…頑張ってください」

こいつらに呼ばれたら、行くしかないだろう。

四人はそれぞれのポーズで俺を待っている。

面倒臭くないのか？なんて野暮なこと聞くな。

楽しい日々が続きそうだ

俺はポケットに手をつ突っ込み、早歩きを始めた。

第五話弁当届けに女子校へ(前書き)

小柳 彩菜 登場！
こやなぎ あやな
後から重要人物になります

傍から見たら不良男

第五話弁当届けに女子校へ

「はたして見た目極悪ヤンキー人間が女子校に行くところなるか。解答、こつなる。」

「何？あんた！わかった！不審者ね！」

頭が痛い。風邪気味だからではない。誤解されてこんなことを言われたからだ。確かに金髪で極悪目付きだ。だからって何も断言することはないんじゃないか？

「もお、ごちゃごちゃうるさいわね〜！」

俺を不審者扱いした女生徒は不機嫌そうに俺の胸ぐらを掴むと引っ張りだした。俺はたまらず怒鳴る。

「俺は加奈に飯を渡しにきたんだ！」

「あんた、加奈とどういう関係？」

女子は俺を、値踏みするかのように睨む。

「俺は加奈の幼なじみだ」

できる限り落ち着いた口調でしゃべったが胸ぐらを掴まれているから少し情けない。

「あんたが？本当なの？」

嘘ついても意味無いだろ。

わらわらと集まってきた周りの人で人垣ができる。その中から一人の化け物が俺たちの前に出てきた。

「ちよつとどうしたのよ。慄夜」

見て判らないか見知らぬ女生徒に尋問されてるんだ。

「加奈。本当にこんなのと友達なの？」

「こんなので悪かったな。」

「えーっと。まず、この金髪が檜 慄夜よ。で、こつちが小柳 彩

菜よ

「悪かったわね。でも、あんたが悪いのよ。あんたがそんな顔だから」

完全に謝ってない。

「謝る気あるか？」

まるで私は正しいとでも言うような顔をして、ない胸をはった。

「謝ってるじゃない」

「悪かったお前に言った俺がバカだった」

「ちよつとそれどうい……」

「じゃあな加奈。俺は急いで帰る。」

俺は校門を走り抜ける。後ろから彩菜が怒鳴る声が聞こえたが無視した。

第六話彼女は可愛い無表情(前書き)

如月 忍 登場！
な女の子です
きつらぎ しのが
色々と不器用

傍から見たら不良男

第六話彼女は可愛い無表情

渋い顔で俺は校門にたっていた。

「次の生徒こーい！」

何も容着検査などしなくてもいいだろう。

体育科の教師が叫んでいる。命名ゴリラ

「お前か！檜！」

そうだともだからどうした。ゴリラめ。

俺をねめつけるような視線をくれるゴリラ。

「いい加減にこの茶色い頭どうにかせんか！」

相変わらず癩に触る奴だ。むかつくぜ。

「聞いたるのか！」

「あー、はいはい聞いてます」

「貴様〜！」

「先生落ち着いてください」

横から割り込んできたのは俺のよく知る生徒会長だった。

「私が代わります。任せてください」

「うむ、わかった。お前なら大丈夫だろう」

それだけ信頼されているってことだ。すごいもんだ。羨ましくも

何ともないが。

ゴリラは一度俺を睨むと違うところで検査を始めた。

「教諭にただ真正直に意見するのはよい行動とはいえません」

「やっぱ、ばれたか」

悪態をあの後つく気たつぷりだったのに。

いつものクールな無表情は眼鏡を付けても健在だ。

「助かったぜ」

「助けたわけではありません。忠告です。髪を黒く染めてきてくだ

さい。できうる限り早く」

「ダメなのか？自毛だぜ」

「ダメです」

断固として硬い表情で言う。

「別に黒は嫌いじゃないんだがな。愛着があるというかなんとか」

「良い機会です。黒く染めてはどうですか？」

俺は唸りながら悩む。

どうしようか？まあ、そこまで言われたらしてやるんじゃないか。

「わかったよ。一回だけだからな」

俺は髪を指でもてあそぶ。

「感謝します」

俺はそこにあつた楽しさに気付いた。

「どうしてそんなにこだわるんだ？この前の服装は見逃してくれた
だろ？」

なぜか固まった如月 忍は消え入りそうな声で言った。

「だから…」

「は？」

「見てみたいから…」

えーっと。それはそれはごもつともだが。

顔を真っ赤にしたいつもはクールな無表情眼鏡生徒会長は俺を放り出すと違う生徒の検査を始めた。結構どころじゃなく可愛かった。もうこっちは見ないだろう忍に背を向けて歩きだした。

「じゃあない髪染めるか。」

第七話昼は楽しく、夜は悲しく（前書き）

次はシリアスな話です

慄夜と皐月と行方不明の兄の昔話

皐月はどうなるのか。

彩菜の恋は？

はてさて慄夜の青春はどうなるのか。

第七話昼は楽しく、夜は悲しく

「さあ！さあ！急ぐんだよ！りつくん！」

髪染に急ぐ必要はないのでは？

「髪を染めて髪を切るー！イメチェン！イメチェン！」

この人の辞書には！マークしかないだろう。

相談相手、間違ってたかな。

「ついたよー！」

そう叫んだ朝日先輩の方を向くとそこにはなかなかの高級感を感じさせる店があった。

金、足りるのか？

「はいはい入ってー」

袖を引っ張られ、連れ込まれるとやはり高級感溢れる内装となっていた。

俺は朝日先輩の耳元で囁いた。

「あのー朝日先輩？俺、金無いんですけど…」

それを聞いた朝日先輩は俺にウインクした。

「だいじよふ！だいじよふ！早くすわって！」

何が大丈夫なのか。

俺を無理矢理座らせるとスタッフと話をしだした。スタッフは俺の方へきて暖かいタオルを頭にかけた。眠くなってきた。

そのまま眠ってしまった。

「なぜか騒がしい。おかげで起きることができた。できましたよ」

スタツフは満足気に俺に語りかけた。

鏡を見る。そこには俺がいた。黒の流れた髪型。

「変えてみるもんだな」

と呟いた。

「およよよ！りっくん格好良いじゃないかねい」

と、興味津々に俺の顔をみる朝日先輩。

「先輩？」

「何かね？後輩」

「みんなに見られてます」

「恥ずかしいですよ。」

「いいじゃないかい。さあ時間がない遊びにゴー！」

と、手を突き上げながら俺の手を取って走りだした。

その後俺たちは食事をしボーリングにも行った。

「あー楽しかった！」

そうですか。さっきのボーリングの玉どうやったらノーバウンドでしかもストライク取れるんですかね。

「あー！本屋さー！わたしや行ってくらあな！」

俺はそんな朝日先輩を見送り近くの店と店との間の空間に背を預けた。すると路地裏から女性の声と数人の男の声が聞こえた。

俺は本当に悪運が強いらしい。

「ねえ〜。一緒に遊ぼうよ〜」

「嫌だって言ってるでしょ！」

「ひゃ〜。彼女恐〜い」

男は猫なで声を出していた。バカに違いない。

「どっか行つてよ!」

激昂した女性はカ一杯、バカを殴った。男は殴られた頬を押さえ
て女性を睨んだ。

「調子に乗んなよアマー!」

こぶしを振り上げたがそれを俺はひねりあげた。

「アギヤー!」

耳障りな声をだす男を近くのごみ箱に投げ入れる。

「女に手をあげるなよバカ。お前が悪いだろ」

「なんなんだよおまえは!」

顔を真つ赤にした男はごみ箱を蹴散らしながらこつちを向く。他
の男たちは茫然としていた。

「通りすがり男だ」

「ふ、ふざけるな!お前達やれ!」

後ろの男たちはすぐに気を取り直して、俺に襲い掛かってきた。

一人目をやり過ぎし、後頭部を肘打ちし、二人目と三人目を共に
みぞうちを殴る。逃げようとした四人目をつかみバカに投げた。バ
カは押しつぶされ、蛙のような声を出した。

「馬鹿な奴」

女性は茫然としていた。俺も驚いた。口を半開きにしていたのに
驚いたのではない。その女が彩菜だったからだ。

「お前……」

「私がおか?」

こいつは俺に気付いていたようだ。

「いやなんでもない」

これ以上面倒なのはごめんだ。

彩菜は俺を見つめて頬を染めている。そんな憂いに満ちた顔をす
るな。とは言えない。言つてはいけない気がしたからだ。

「こんなとこ早く出るぞ」

俺はそう言つと彩菜の手を取つて表通りに出た。彩菜は赤くなつてうつつむいていたが。小さく、

「ありがとうございます」

と言つた。

「俺は用があるから」

そう言つと俺は本屋に歩きだした。

「じゃあな」

「また……」

はかない声だった。

振り向かなかつた。自分がずるく感じたからだ。

「りつくん何してたん？」

朝日先輩はそう楽しそうにいった。

人助けですよ。

「ふ〜ん」

と、意味深な視線をくれた朝日先輩はそれ以上追求しなかつた。有り難い。

「わたしやここまでさ。じゃあねりつくん。楽しかったよ」

そう言つと朝日先輩は頬にキスをした。にっこり微笑んで去つていく。

二人は知らなかつた。さっきのキスを見られたことを。そして、慄夜にさらなる悪夢が襲い掛かるうとしていた

「ただいま」

「おそかつたな兄」

二階から声が聞こえた。

「髪切つてきたんだ」

「ほうほう。見せてみな」

靴を脱ぎ、下りてきた妹に振り向いた。

「どうだ黒くしたんだがおかしいか？」

俺は楽しげに言った。妹はとても驚いたのだと思った。しかし違った。顔が固まったまま俺の顔を凝視していた。体は震えていた。

俺は不審に思い、近づいた。

「ないで……」

「は？」

俺は忘れていた。年月が妹のブロックワードを忘れさせていた。

「来ないでー！いやー！いやー！……」

大声を出す妹に俺は走る。

「どうしたんだ！どうしたんだ臯月！！」

駆け寄るが俺を拒む。

「いや！いや！こつち来ないで！こ……ない……で……」

ボタンと音がした。妹は横倒しになった。

「臯月……！……！！……」

叫びが響く。しかし誰も答ええない。

第八話 崩壊した家族（前書き）

過去話です。二話またぎです。これが終わったらそれぞれのエンドストーリーを考えようかと思っていきます誰とのどんな終わり方になるか

さあどうなるか

こいつが良

いと思った人、意見をどしどし応募します

お願いしまーす

第八話 崩壊した家族

これは九年前の八月上旬夏真っ盛りの時の話だ。

俺たちは茫然としていた。そしてまた、その言葉を紡ぐ。

「父さんと母さんが死んだ？」

原因は対向車線から突っ込んできた泥酔トラックだった。一種の交通事故。

そんなわけない。そんなわけないんだ！嘘なんだろう？質の悪い嘘なんだろう？

誰も首を縦に振らない。みんな渋い顔をして俺たちを見ている。

妹はガタガタ震えている。俺たちの兄貴がそつと妹を抱き締める。そんな兄貴は俺にもいたわりの視線をくれた。『お前は大丈夫か？』

「大丈夫。大丈夫さ。俺はだい…じょう…ぶ…」

なんだよ。何で俺、泣いてんだよ。俺はもう泣かねえって決めたじゃないか。母さんと父さんと約束したじゃないか！止まれよ！手の震え！止まれよ！何で拭いても拭いても溢れてくるんだ。くそ！くそ！くそ！兄貴は俺を抱き寄せた。なぜだろう。とても安心できた。

だが妹は生気のない眼で抱かれていた。不審に思い、呼び掛ける。「臯月？」

兄も気付いたようで抱き締めていたのを放したと同時に妹が倒れた。

「精神的なショックが原因のようですね。一日安静をとって様子を

見ましよう」

「ありがとうございます」

俺は葬儀の準備で忙しい兄貴の代わりに妹の所にきていた。

診察室を出て、妹の病室に入る。

今は安らかに眠っている妹の姿があった。俺は苦しそうに寝ているものと思っていたが違ってほつとした。

俺はそんな妹の額に手を置いて撫でた。

「お前は俺よりも純粹だったんだな」

そうだこいつは純粹だった。だから両親の死を受け止められなかった。こいつは大事な妹だったのだ。

撫でていた手を離し妹の手を握った。そして、柄にもなく優しく語りかけた。

「大丈夫だ。俺も辛いけど、絶対俺はお前を護るから、お前は必要ないとかシスコンだとかバカ兄とか言うかもしれないがそれでも俺はお前を護る。護ってみせるさ」

強く握った手に俺は誓う。もう両親はいないのだから。

第九話 苦悩は続く誰が為に（前書き）

序章終了です。この後の話は誰がヒロインになるか分かりません。

慄夜は誰を選び、どんなエンドを掴むのか。

投票してもらえたら光栄です。意見を

お願いしまーす

第九話 苦悩は続く誰が為に

「兄！おーい兄！おきろー！」

「うおっ！」

「やっと起きたか」

妹は俺に笑いかけた。いつのまにか俺は寝てしまっていたようだ。そんなことより

「お前大丈夫か？頭痛とかしないか？」

「しないよ。その前にバカ兄、いつまでこの手を握っているつもりだ？」

今だに握ったままの手を俺は離す。名残惜しそうに妹の手はが動いたような気がした。妹は俺をからかうような目付きで言った。

「そんなに私の手は触り心地が良かったか？」

「そうじゃねえ。確かにやわらかくはあったけど」

「やらしー。変態だ。変態」

「うっせえ」

そんな憎まれ口を叩きながら話を切り出した。

「お前は葬儀どうする？」

「葬儀って誰の？」

俺は冗談だと思った。いや、思ったかったんだ。きつとふざけているだけなんだと

「誰って、父さんと母さんに決まってるじゃないか」

「父さんと母さん？誰？それ？」

俺は絶句した。

妹は両親のことを忘れていた。

「よほどショックだったのでしょうか。脳が理解を拒否しています。忘れたわけではありません。脳の奥底に閉じ込めてあるだけでしよう」

俺はそんなことほとんど聞いてはいなかった。

「通常の生活には支障はきたさなと思います。葬儀やお通夜などに参列するのは無理でしょう。悪くすると精神崩壊もありえます」俺は喉元に刃を突き付けられたような錯覚に陥った。

あいつがあいつでなくなるだって、そんなあいつに俺は何ができるっていうんだよ。

結局妹は参列せず俺が、父さんと母さんに妹の分もお別れを言った。

父さんは相変わらずのぶっきやう面のような安らかな顔だった。母さんのブロンドの髪は今も生きているのではないのかと思うほど明るく光っていた。

俺は必死に涙を堪えた。父さんと母さんの前で位意地を張りたかったのさ。

燃えていく父さんと母さんを見ていると思いつつ出まで消えていくよ
うな気がして涙がこみあげてきた。歯を噛み締める。

もう泣かないと決めたんだ。

兄が小さく

「安らかに眠ってくれ」
と言ったのが聞こえた。

そんな俺たちを引き取ってくれたのがじっちゃんとはあちゃんだ
った。そして今にいたっている。

なぜ妹が逃げようとしたのか。それは黒髪の俺のせいだった。俺
の顔はあの事故当時の父さんにそっくりだったためだ。

すぐに髪の色を落とした。

「ごめんな。俺、お前を護れなかった。それどころか追い詰めちま
った。ごめんな。本当にごめん」

前のように妹の手を握り謝った。そして、ある決断も考えだして
いた。

次の日。元気になった妹に振り回されたがうれしかった元気にな
ってくれて。顔には出さなかったがな。しかし、昨日のことは忘
れていた。

『こいつは本当のことを知ることができるのだろうか』
俺は神様にむかってそう問い掛けた。

第十話 誰が俺の大事な人（前書き）

ここで分岐します。次からまずは意見のあつた朝日 楓です。

第十話 誰が俺の大事な人

淀んだ空はまるで俺の心を表しているようだ。

そんなことを考えながら俺は看病をしていた。妹は家で安静にしている。

まだ調子が治らないらしい。

「学校に行つていい」

と言われたが俺は断った。うれしそうな顔をしたように見えたがきつと気のせいだろう。

一応医者と呼んだが特に気にすることはなかった。俺は久しぶりに豪華な飯を作ることに決め、台所で材料を切りはじめた。

「作りすぎた」

色々なものを作ったせいで大量に作りすぎたようだ。いくらなんでも横綱になる気はない。

「しょうがない」

そう呟き受話器に手を掛けた。

いつもの通話前の音が流れる。少ししてその人物が出た。用件を話し、きつた。

少しして

「こんにちはー！」

と、明るい声が聞こえた。俺が出るといつものメンバープラス三人がいた。

加奈に朝日先輩、師走、忍、なぜか彩菜に宇美。

俺は師走に耳打ちした。

「多いのに文句はない。でもなぜあの二人がいる」

「朝日さんがつれてきていたんだよ」

俺は朝日先輩を見る。楽しそうに俺の家をみて回っている。只者じゃないな、あの人は。

宇美は俺の所にきて頭を下げた。

「あの、こんにちは。先日はありがとうございました。それでさっちゃんは…」

「あいつは二階で寝てる。行ってやってくれ」

やわらかく微笑むと言った。

「先輩って優しいんですね」

言つと赤くなり二階に上っていった。いつかゆでダコになりそうな奴だ。

「慄夜、頬がゆるんでる」

頬を膨れさせた加奈が言った。なぜ怒ってるんだ。そこに彩菜が近寄ってきた。

「どうせ変な妄想してたんでしょ。あの人ならきつとこんな変態みたいなことしないできりつとしてるはずよ」

夢見る少女つて感じだな。

「彩菜、この前かつこいい男の子にあつたらしいの。でね、ベタぼれなのよ」

「そうか」

複雑だな。てか、俺、詐欺じゃねえか？それ俺ですつて言えねえよな。

俺はみんなを食事場に案内をし、皿を人数分わける。いつものメンバー以外は目を丸くしていた。悪かったな、姿にあわなくて。

「いい匂いだね」

と、朝日先輩。お褒め頂き光栄ですよ。

「人は見かけによらないのね」

と、彩菜。お前はしゃべるな。

「ほらほら食べよー」

と、加奈。まったくだ。

「いただきます」

と大きな声が家中に響いた。

近所迷惑も考える。

騒がしかったのもいつのまにか静かになっていた。騒がし

た加奈はすでに疲れて眠っている。

師走と忍は門限だとかで早々と帰った。忍からは、おいしかったという誉めももらった。

元気になった妹に宇美は送ってもらっていた。帰るとき、ひたすら

「おいしかったです」

と、連呼していたのを覚えている。

加奈を運ぼうとして彩菜に

「俺が運ぶ」

と進言した。彩菜はあからさまに嫌な顔をして

「変なことしないなら」

と言った。

朝日先輩とは食事の時、話をした。

「金色に染めたんだ。でも理由があるんだよね？」

柔和な目で俺を見る朝日先輩はいつにもない真剣さで聞いてきた。

朝日先輩は俺の心の揺らぎがわかったのかもしれない。

「少し外出ませんか？」

「いいよ」

朝日先輩は快くついてくる。その後ろで加奈が皿をジャグリングしていた。

今は六月下旬。気温は心地良いくらいだ。

俺と朝日先輩は庭の手作り丸だしベンチに座った。

「すいません。あいつらには教えたくなかったんで」

「いいんだよ」

そこには自然ないたわりがあつた。俺はその優しさに便乗させてもらった。

俺は血を吐くように昔のことを話した。言ったら結構すつきりした。

「すみませんこんな辛気臭い話して」

頭を下げる。その頭に朝日先輩は軽く口付けた。

「いいんだよ」

いつからかおまじないのようになったこの軽いキス。今まで何度癒されたことか。今はこの優しさに酔つても良いだろう。

俺は涙をこぼした。

その時、初めて悟った。俺は泣きたかったのだ。朝日先輩の

手は俺が泣き終えるまで頬に触れていた。

「もどりましようか。朝日先輩。それとありがとうございました」

「いいよん。りっくんのごが今まで以上にわかったから」

そういつてまた微笑んだ。眩しい。俺はこの人に、頭が上がりないだろう。

俺たちが戻ると加奈がジジイの酒を一気飲みしていた。たおれるぞ。

案の定倒れた加奈を担ぎ、彩菜と歩く。彩菜はチラチラこつちを

見たが何も言わない。じれったい。

「なんだ？」

少し戸惑ったように見える彩菜は言う。

「あんだ…昨日どこいたの？」

ドキリとしたが俺はあまり表情に出さないように言った。

「家だが？それがどうした？」

「いや。なんか彼に似てたから。そんなわけないわよね」

なんとか山を越えたようだ。

「慄夜…」

背中に動く感触がした。

「なんだ？加奈」

「好き…」

「何ーーーーー！！」

横を見ると顔を真っ赤にした彩菜がいた。俺も大慌てだ。

「慄夜の…ご飯…好き」

肩から力が抜けた。なんだ。そっちか。彩菜もほっとしている。

「あつ、私こっちだから」

「そっか。気を付けろよ」

「あんだの方が危ないわよ！」

そっかい。

それだけ言うとさっさと行きやがった。

加奈の家につくと加奈をベットに寝かせた。

明日の為の飯を作ってやる。加奈は淋しいだろうか。淋しいだらうな。

俺たちは似てるんだ。だから俺は加奈に親近感を感じるのか。

傍からみたら不良男

暗い夜道。俺はあいつらのなんなんだろう。
友達？顔見知り？知人？恋人？
そろそろはつきりしないとな。
そんなことを俺は決断した。

最終話 おまじない(前書き)

ありがとうございます。読んでくれましたあなた

新作はもう少し後になりますですね。

傍からみたら不良男最終話始まります

ありがとうございます！

最終話 おまじない

今日、俺は遊園地に行くことになっている。朝日先輩に誘われたからだ。ラフな格好でしているが、結構ドキドキだ。俺にとって一世一大の大事件の幕開けであつたりもする。

「行ってくる」

「あの…兄？」

齒切れの悪い妹には昨日のうちにある話をしてある。今日の俺の目標のことだ。あれから妹は妙にそわそわしている。俺のことなのに。変な奴だ。

「本当にやるのか？」

今日の妹はやはり変だった。俺が変になるはずなのに、まったく心配してくれるのは嬉しいが俺は大丈夫さ。すこぶる調子もいい。天気もいい。それ以上神様に頼むのはいくら何でも可哀相だ。神様が現代人の常識となるヨボヨボジジイならな。もしもフルマラソンを走っても生き生きしている若者ならいくらでも願うんだが。

「わかった…」

驚いたね。なんて物分かりが良いんだろうか。毎日これなら助かるのに。

とてつもなく鈍いバカ男は妹の心情をわからない。そして慄夜は手を振るとさっさと家を出た。

閉まる戸に妹が手を伸ばし、しかしまた手を引っ込めたこと。その口から

「お兄ちゃん…」

と、消え入りそうな声が漏れたこと。静かに泣いたこと。

それら全てを知らぬまま。

岬宇美は皇月から相談されたことで悩んでいた。皇月の兄、慄夜のことだ。

慄夜に向けていた密かな想いが彼女をからめとっていた。心の痛みを堪えながら。

宮田加奈は泣いていた。誰も居ない家の中であただ孤独にいつもの強気な彼女の面影もなく、泣き続ける。慄夜を思って。

如月忍はいつものように朝ご飯の材料を切る。違うのは野菜を厚く切ってしまったこと。ただ無心で切り続ける。いつもの彼女になりきるために誰にも悟られないために。

小柳彩葉は知っていた。あの日の男が慄夜だと。だが、彼女のプライドが認めることを拒んだ。彼女も悩む、慄夜のことだ。

朝日楓は悩む、服装のことだ。彼女にしては珍しく悩む。時間までは十分にある。まだまだ悩む。

先に着いたのは慄夜だった。遊園地前の噴水できたるべき彼女を待つ。

いつぶりだろうか。遊園地にくるのは。十年近く来てなかっただろ。う記憶がある。来たって嫌な思い出しかなかったからだ。

「おまたせーりっくん！」

そう言っつて駆け寄つてきたのは紛れもなく朝日先輩だった。珍しくスカートなんかはいていて、それが細い足とマツチして何とも言えない美しさを醸し出していた。俺の胸のビートはへビメタを奏でている。

「きれいだ……」

と漏らしてしまった。

「そうかな」

自分の姿を確認していた。

半ばぼけーとしていた俺は朝日先輩に引張られて改札口に行く。入場して最初に行ったのはジェットコースター。朝日先輩ははしゃいでいたが俺は人生初の幽体離脱を経験しそうになった。その後はお化け屋敷、メリーゴーランド、コーヒーカップそして二度目のジェットコースター。お化け屋敷はこれといって恐くなく二人で苦笑した。メリーゴーランドとコーヒーカップは恥ずかしくてたまらなかった。

二度目のジェットコースターは俺にめまいをくれやがった。面目ない。

ジュース片手に戻ってきた朝日先輩のご恩を受け取り、飲み干した。

「落ち着いたかい？」

「ええ、十分に」

俺は立ち上がる。もう夕方だ。あれほど意気込んでおいて何も言

いだせなかった。失敗するイメージしか浮かばない。

「でもよかった。りっくん。遊びにきてるのにそんなに緊張しちゃって。でも楽しかったー！」

この人はずっと俺のことを考えていてくれたのか。俺は恥ずかしくなった。俺は自分のことばかり考えて、この人に何もしてあげられなかった。もう迷わない。俺は俺の気持ちをぶつける。

「朝日先輩」

「何？りっくん」

優しく笑いながらこっちをむく。

もう迷わなかった。

「俺は朝日先輩のことが好きです。俺と付き合ってください」

「りっくん…」

「俺はずっと朝日先輩のことが好きでした。でも俺は妹のこと、とかで逃げてたんです。朝日先輩にこの前妹のこと話しましたよね」

「うん。すごく嬉しかった。りっくんのことが背負ってるものが見れて」

朝日先輩は笑っていた。少し涙を流しながら。

「俺はずっと俺にとって必要なのは誰か、考えてきました。俺は朝日先輩しか思い浮かびませんでした。俺にとって朝日先輩は大事な人なんです」

俺は朝日先輩に近づいていく。

朝日先輩の涙を拭った。

「朝日先輩、あのおまじないしてもらっていいですか？」

朝日先輩は笑って俺に顔を寄せてきた。俺も寄せた。

そして俺たちはキスをした。

「あれが返事と受け取っていいですか？」

朝日先輩は微笑んで

「バカ…」

傍から見たら不良男

と、言った。

それが朝日先輩との
エンドストーリー！。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4848b/>

傍からみたら不良男

2008年11月7日08時11分発行